

地域に未来はあるか

● 第三部 発展幻想を超えて⑥

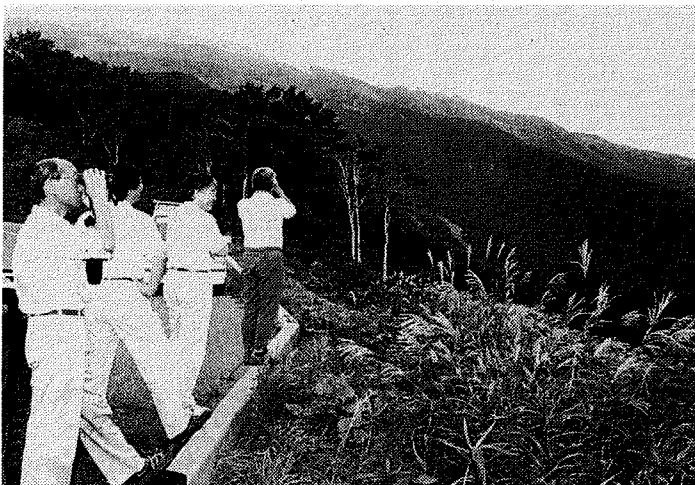
国の天然記念物、イヌワシ。翼を広げた長さが二・一メートルで、国内に約三百五十羽しかいない。こうした希少な野生生物の保護が開発かを巡り、各地で論争が起きている。その対立を乗り越えて新しい道を模索し始めた地域がある。東北第一の高峰、鳥海山(二二六〇メートル)の山すそにある山形県八幡町だ。

▼町全体が論争の渦に

「町民も役場もまち全体が悩みました」――町企画開発課の土井一郎課長補佐は振り返る。

日本山岳会が町内の鳥海山南側山ろくでイヌワシの営巣を確認したのは九五年四月。その付近でコグド(東京)による大規模スキー場の建設について県の自然環境保全審議会がゴーサインを出したわずか一週間後だった。人口八千人足らず、総面積の八四％が林野の過疎の町。都会の大資本による開発構想に多

イヌワシが教えた町づくり



鳥海山の山頂へ続く道の途中でイヌワシ飛行を観察中の町民と町職員

くの町民が希望を見いだしていた。

地元自然保護団体は営巣確認を機に計画撤回を求める運動を一段と強め、計画推進を訴える町役場、商工会と対立。まち全体が論争に巻き込まれていく。

八幡町では昔から炭焼き職人などの間で「山にもものすごく大きな鳥がいる」ことは知られていたが、繁殖がわかったのはこのときが初めてだった。その後、鳥海山ろく全体で四つがいが確認された。イヌワシの行動範囲は最大九千秒と広い。コース六本をつくるスキー場予定地二百九十秒はイヌワシが頻繁に姿を現す地域と重なっており、両立は困難だった。

結局町は反対運動の広がりによって九七年九月、今年三月には仲間と手分けしてリストをつくった。さらに調査を続け、小学校の副読本としてまとめる考えだ。「スキー場はどこでもつくれると失った町が選んだ道は、イヌワシを地域づくりのシンボルとして打ち出す戦略に転じる」ことだった。「すばらしい自然を子々孫々まで伝え残す」として、イヌワシを「町の鳥」に指定。独自の保護条例や自然環境保全基金の創設も検討中だ。

▼住民に参加への意識

元中学校教師の佐々木有恒さん(72)も初めは「雇用も生まれるし、お金も落ちる」とスキー場計画に反対ではなかった。町外の人が目立つ建設反対の署名運動とも一線を引いてきた。だが、保護論争

の中で話し合おうと、自分の町をもっとよく知り、地域づくりに参加しなければいけないが強く思った。

町内の動植物を調べる「緑の玉手箱調査会」を立ち上げ、今年三月には仲間と手分けしてリストをつくった。さらに調査を続け、小学校の副読本としてまとめる考えだ。「スキー場はどこでもつくれると失った町が選んだ道は、イヌワシを地域づくりのシンボルとして打ち出す戦略に転じる」ことだった。「すばらしい自然を子々孫々まで伝え残す」として、イヌワシを「町の鳥」に指定。独自の保護条例や自然環境保全基金の創設も検討中だ。

▼振り向けば鳥海山

しかし若者の流出は依然続いていく。これからの本格的な高齢化をどう乗り切るかなど課題は山積したままで、町の前途はなお厳しい。

足元の自然振興の核に

後藤孝司町長は「いままでは東京と比べてあれもない、これもないと無い物ねだりをしていた。イヌワシに言われて後ろを向いたら鳥海山があった」と述懐する。開発をあきらめて立ち止まったら、別の行き方があることに住民が気付いた。地域づくりを傍観する町民も少なくなかったが、「町を良くするには他人任せではだめだ」という意識が芽生えてきた(後藤町長)。

ことがこれからの力になる。
(「地域に未来はあるか」取材班)